

machi-no
ne

まちのね

issue 6
winter, 2026



レヅジョ・エミリア
現地スタディツアー
TOUR REPORT

考える、想像する
ともに生きているということ
—— タンチョウとの出会いから
まちの保育園 吉祥寺 5歳児クラスの事例紹介

自治体共創プロジェクト
保育とまちの循環
加賀市にみる、
これからのまちづくりの新しいかたち

まちの保育園・こども園/まちの研究所
まちのカンファレンス 2025
開催レポート

考える、想像する ともに 生きているということ —— タンチョウとの出会いから

まちの保育園 吉祥寺
5歳児クラス

まちの保育園 吉祥寺の近くには、自然豊かな井の頭公園があります。散歩でよく行く雑木林、動物園、水生物園は、休日に家族で遊びに行く子も多く、すっかり慣れ親しんだ場所です。描くことが大好きな、けやき(5歳児クラス)の9人。昨年春、子どもたちからの提案で、水生物園へ向かったところからこの物語は始まりました。鳥や魚の本、双眼鏡、そして「かきたくなるかも」と、紙とペンを持って。

1 こんどきたら、うまれてるかな？

「タンチョウがたった！」
「みて！ やっぱりたまごがある！」
「しゃんとって！ あなたまご」
「あれたぶんさ、おんなだ」
「ママなんじゃない？」
「あれがさ、おとうさん」
「あなたまごが、こども」
「こんどきたらうまれてるかな？」



そのとき、タンチョウがくちばしでたまごを動かしました。

「たべようとしてた」
「ちがうよ、たべようとしてるんじゃないよ」

保育者：何してるんだと思う？

「いっかいうごかしたんだよ」

「なんで？」

「たのしいからじゃない？」



部屋の奥でじっと座っているタンチョウを見た時から、「たまごをあつためてるとおもう」と予想していたみんな。

ゆっくりと同じ場所で観察をしていたからこそ、この瞬間に出会うことができ、想像していたことが本当だったのだ、と自分たちの目で見て確認することができました。

2 いま、たまごの中はどんなふうになっていると思う？



「たまごのなかには、もうあかちゃんがせいちょうしてる。いっぱいいるとおもうんだ」



「いっぱいいるけど、ぜんぶちがうとおもう」



「たまごにすんでるってことだから」と、家の中を描いていきます。

「ぜんぶとびらがあるからめっちゃたいへん」

冷蔵庫、ごはんを食べるところ、お金……たまごの中に生活がありました。



「これはしんぞう。あと、けっかん」

「あ、まって。もうひとりかく」

「きょうだいなんだよ。それでつながってる」

「たまごがけっこうおおきいからふたりいるかなっておもった」

3 ニセモノのたまご

何度か通っていたある日、タンチョウの部屋の前に看板があることに保育者が気付きました。「繁殖は今年もお休みするため、タンチョウはニセモノのたまごをあためています」たまごから生まれてくることを楽しみにしていた子どもたち。いつかは、この事実を伝えなければいけません。私たちから話すよりも、専門の方から直接話を伺えたらと思い、井の頭公園の動物観察員の方に園に来ていただく機会を設けました。

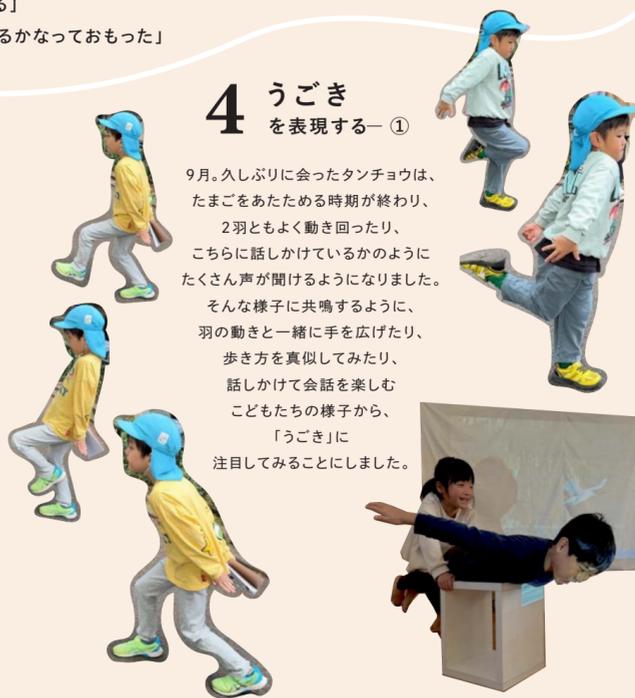


看板を目にしたとき、保育者はとてもショックを受けました。『みんなはこのことをどう感じるだろう。"生まれてくること"を信じて、楽しみに待っていた気持ちを整理できるだろうか？』しかし、子どもたちは言葉ひとつひとつを理解しようと真剣な表情で耳を傾け、まっすぐにそのまま、事実を受け止めている様子でした。そしてその後も変わらず、タンチョウに会いに出かける日々は続いていきました。

タンチョウは、繁殖期になるとペア以外の個体を排除しようとするため、親子で飼育ができず、ヒナが生産できる場所がない。

温めている(抱卵している)たまごをすぐ取り上げてしまおうと、その度にたまごを産むためメスの体力が弱まってしまふ。

飼育員さんは本物そっくりのニセモノのたまご(擬卵)を作り、本物と入れ替えている。



4 うごき を表現する①

9月。久しぶりに会ったタンチョウは、たまごをあためる時期が終わり、2羽ともよく動き回ったり、こちらに話しかけているかのようによく声がかかるようになりました。そんな様子に共鳴するように、羽の動きと一緒に手を広げたり、歩き方を真似してみたり、話しかけて会話を楽しむ子どもたちの様子から、「うごき」に注目してみることにしました。

5 うごき を表現する②



「いいことおもいついた。これをさしてはねにできそう」
「あ、わかった。とぶようにすればいいんだ」
「こうすればういてるように見えるから」
頭の部分には、大きさのバランスを考えてドングリを選びました。



写真をどの向きから撮りたいか聞いてみると、「まえがいい。とんできてみたいになるから」「みて、かげもめっちゃうおもしろい。カニみたい」



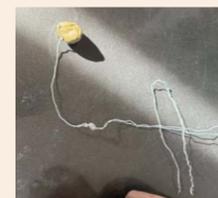
「あかいみは、あたまとほつべたにした」
左右に1つずつ付けた柿の種は、羽根です。
「あしふとくなっちゃった！
たてるのむずかしいんだもん」



凹凸のある実で模様をつける。
「タンチョウのあしつてがらみたいいなあるじゃん？
にんげんもちよつとだけあるよね、ほら」
自分の手を見せながら話してくれました。



「はばたいるところ」
羽根を広げると2メートル以上ある、と教えてもらったのが印象的だったのかもしれませんが。水生物園でも、何度かその様子を見ることができました。



「なんかこれ、ほんもののタンチョウのほねみたいだ」



「あたまとくちばし、めっちゃうまくできた！」
「くびのぐねってかんじもできる」



iPadのストップモーション(コマ撮り)のアプリを使って、物語を考える。



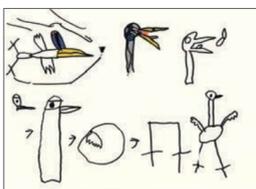
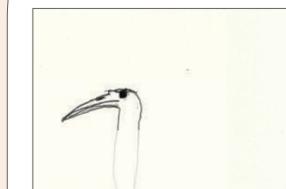
「たまごをあつためたけど、だれかがもってっちゃって、それでさがしにいって、またもどってくるっておはなし」

6 にんげんもそうでしょ？

「くろとろとあかだけじゃない！」
「ここ、くろじゃなくてグレーだ。」
「めのところオレンジ！」
にんげんもめのしたにいろあるよね」
「しってる！ それ"くま"っていうんだよ」
「あたまあかじゃない」
「なんかここ、みどりもある」
「にんげんのめとおなじ。」
ほら、うえのとこと、したのとこと」
「あ！ めにみんながうつってる！」
「ほんた！ だつてにんげんもうつるじゃんほら」
「じゃあみんなのことみえてるってことだ」



「このかおはちよつとこわい」
「めがしろいから」
「このくちのぶぶん、むかしのきょうりゅうにってる」
「べろがうえにあがってる」
「はなはさ、つながってんだよ。だからあいてる。」
にんげんもそうでしょ？」
「どうしてあたまのところだけひふなの？」



子どもたちの100の言葉*は、いつもみんなの中に"生きているタンチョウの姿"が鮮明に存在していることを教えてくれます。

「たんちゅうー！ おはよー！」と駆け寄るみんなの後ろ姿は、気心の知れた友だちに会うような、何気ない日常の風景に感じられます。いつでもそこにおいて、変わらずに受け入れてくれる存在。タンチョウはとても賢く、特定の人を覚えて慣れることもあるそうです。子どもたちの呼びかけに反応したり、柵のぎりぎりまで近づいてこちらを見ている様子は、「今日も水色帽子の子たちが来たな」と、優しく出迎えてくれる気がしてなりません。

「いちねんせいになったらランドセルみせにいかなくや」「みずいろのぼうしかぶってあいにいかないと」けやきさんとタンチョウの物語りは、きっとこれからも続いていくことでしょう。

*……レジョ・エミリア・アブローチの理念の象徴でもある、ローリス・マラグツィによる詩「子どもたちの100の言葉」より。子どもは生まれつきたくさんの可能性や能力を持っていて、それを「奪わないこと」が何より大切だという考え方。

レッジョ・エミリア 現地スタディツアー 2025 TOUR REPORT



1 ロリス・マラグッツィ国際センター。2 レッジョ・エミリア市内を移動中。3 4 REMIDAにて。REMIDA・・・地元企業から出る廃材を子どもの創作活動を支える素材として活用する“廃材アップサイクリングシステム”および素材庫

JIREAでは、毎年秋に「レッジョ・エミリア現地スタディツアー」を開催しています。この研修プログラムには、まちの保育園グループの職員はもちろん、一般の方も参加することができ、「レッジョ・エミリア・アプローチ」の教育哲学の理解から、最新の実践の様子まで深く学ぶことができる国内唯一のレッジョ・チルドレンの公式研修プログラムです。本特集では、40名を超えるみなさまにご参加いただいた昨年11月のスタディツアーの一部を、写真を交えながらご紹介いたします。

- 【今回のツアー内容】
- ・レッジョ・エミリア・アプローチの教育哲学基礎講座
 - ・ドキュメンテーションとプロジェクトツィオーネに関する実践共有
 - ・小グループ制のアトリエワークショップ
 - ・現地の乳児保育園・幼児学校・小学校の訪問
 - ・REMIDA（創造的リサイクルセンター）訪問・対話
 - ・テーマ特化型プログラム（5日間コースのみ）

用語解説

ツアーの企画・運営はJIREAと、レッジョ・チルドレンが協働で行っています。

JIREA Japan Institute for Reggio Emilia Alliance
まちの研究所および、まちの保育園・こども園の代表の松本理寿輝が代表を務める、レッジョ・エミリア・アプローチを学び合う本国イタリア（レッジョ・エミリア市）を中心とする国際ネットワークの日本窓口団体。

レッジョ・チルドレン
レッジョ・エミリア市の自治体立の乳幼児教育の実践と思想を、世界にひらき、つなぎ、育てていくための国際的文化的・教育機関。

レッジョ・エミリア・アプローチ
北イタリアのレッジョ・エミリア市の乳児保育園と幼児学校（自治体立の園）において形作られ、1990年代にアメリカ版ニューズウィーク誌で「世界で最も先進的な乳幼児教育」として取り上げられたことを発端に世界中に広がった教育アプローチ。まちの保育園・こども園、まちの研究所は本アプローチから多くのインスピレーションを受けています。このアプローチはこどもの「協働性」と「創造性」を大切に、「市民」としてのこどものコミュニティへの参加や、こどもたちの豊かで美しい創造性へのリスペクトを特徴としていると言われてます。これらの考え方は、各園の保育や子どもとの関わり方にも大きな影響を与えています。

ペダゴジスタ
大学で教育学または心理学を専攻した教育者。実践と教育研修を結びつけるプロフェッショナル。また、家庭やコミュニティとの関係を築いていく役割を担う。

アトリエリスタ
美学の専門性を持ち、こどもたちと教師たちの創造的探究に参加し、美的視点とその専門性により、学びを豊かにするプロフェッショナル。

ロリス・マラグッツィ
レッジョ・エミリアの教育哲学を確立し、地元の行政官と共に、レッジョ・エミリア市の乳児保育園と幼児学校のネットワークを設立した教育哲学者・社会心理学者。

ロリス・マラグッツィ国際センター内 幼児学校小学校
幼児学校と小学校を分けない環境づくりが工夫されており、3歳から11歳のクラスがランダムに組み合わせられている。例えば、4歳の横に3年生のクラスがあるなど。

乳児期～学童期までの接続された学び

今回のツアーは3日間と5日間の2つのコースがありましたが、どちらの参加者も全員が学校を見学することができました。まず2日目に小学校、そして3日目にディアーナ幼児学校とアンデルセン幼児学校を見学。さらにベレッリ乳児保育所（レッジョ・エミリア自治体乳児保育園）にも行くことができ、乳児期から学童期までの連続した学びのプロセスを実際に目の当たりにできたのは大変貴重な経験でした。今年から、こどもたちがいる午前中の時間帯の見学受け入れがコロナ前の体制に戻ったことも大きかったと感じています。実際に子どもがいる場を見ることができたのは本当に大きな違いで、ディアーナ、アンデルセンともに、こどもたちが活動し、先生が保育をし、アトリエリスタが少人数で関わっている様子を間近で見学することができました。

小学校では、実際の授業を見ることはできませんでしたが、環境の見学、先生方からのお話を通して、レッジョ・エミリア・アプローチの教育理念が、小学校の環境や実践からも色濃く感じられたという意味で大変学びが深かったです。教室には、黒板に向かって椅子が並ぶ配置はなく、意味を持ったテーブル（=学びの意図とこれまでの文脈が見える化されたテーブルや場が環境としていくつか配置されており、プラットフォームや場としてのテーブルや、ある区切られた場、ライトテーブルを指す場合も）が5～6台配置されています。教室内には継続的に探究できるミニアトリエが併設され、それぞれに明確な文脈とコンセプトが示されています。

例えば「友だちの言葉」というテーブルでは、同義語を通して集合の概念を学びます。クラスメイトの名前のある単語、仮に「T」があった場合、「T」がつく単語「トマト」などTがつく仲間と捉えることもできますし、クラスメイト全員の名前に「T」がいくつあるか？などの発想も入ります。アルファベットを使いつつながら、同じという概念や言葉や文字、数学的な思考も入るようデザインされているテーブルです。一見、言葉遊びのようでありながら、数学的思考や社会的理解も同時に育てられています。また、学びは教科ごとに分断されおらず、場とカリキュラムが柔軟にデザインされており、学びに焦点をあてたプロジェクトとして進んでいました。

0～11歳の教育カリキュラムについて

レッジョでは、国のカリキュラムの中から特に大切にす要素を明確に選択し、推し進めることを宣言しています。その柱として示されたのが以下の8つです。

- 社会構成主義に基づくアプローチ
- デザイン思考
- アトリエと「百の言葉」
- 教育的チーム
- プロジェクトと研修
- プロジェクトツィオーネ（問いをデザインし、学びを深めていく探究プロジェクトのこと）
- 文化的組織
- 政治的側面と街・世界との関係性

これらは国の指針と大きく異なるものではありませんが、レッジョはそれを意識的に選び、結びつけて実践しています。

2026年度 レッジョ・エミリア現地スタディツアー 開催決定！

JIREAでは、2026年度も、レッジョ・チルドレンとの協議の上、現地スタディツアーの開催を予定しております。ツアー（日本離発着でのパッケージツアー）形式での参加者募集に加えて、参加をご検討の皆さまからのご要望を受け、人数枠限定で現地集合・現地解散枠（レッジョ・チルドレンでの研修プログラムのみの参加枠、研修プログラムはツアー参加者と合同）を募集予定です。



5 6 9 ベレッリ乳児保育所。7 8 アトリエワークショップの様子。

学びにおいて、常に理論と実践を循環させることが重要であるという考えは、0歳から11歳まで一貫しています。

“Practice without theory is blind; theory without practice is empty.”
理論のない実践は「盲目」であり、実践のない理論は「空虚」である、とエレナさんは語ってくださいました。

教師の関わりと評価の考え方

アトリエリスタのフランチェスカさんは、子どもの学びを支える視点として次の点を挙げていました。

- ・どのような空間で行うか
- ・どのように時間を使うか
- ・どのような表現を選び、どんな言葉をかけるか
- ・どのような素材を提供するか
- ・一人ひとりがどのような経験をしているか
- ・友だちどのように交流しているか
- ・大人がどのように研究し、探究を支えるか

これらを通して、ドキュメンテーションや作品によって学びを可視化し、理論と実践を循環させていく。この姿勢は幼児学校でも小学校でも変わらないと語られていました。

レッジョから日本へのメッセージ



研修最後の対話の中で語られたのは、レッジョ・エミリア・アプローチの本質でした。保育者や保護者などこどもを取り巻く大人は「教える人」になるのではなく、「こどもや仲間と一緒に探し求めていく姿勢」を大切にしたい、ということです。そこには、ともにいる幸せと、世界に対する責任があると語られました。レッジョの教育者たちは、目の前のこどもだけでなく、戦争やジェンダーの問題で学べないこども、孤独や閉塞感の中で生きるこどもたちの存在も常に強く意識しています。

Nessun bambino puo stare bene, se altri bambini soffrono, vicino o lontano da noi.
近くても、遠くても、子どもたちが苦しんでいるならば、どの子どもも健やかでいることはできない。
ロリス・マラグッツィ

物事が簡単に善悪で分断されやすい現代だからこそ、「壁を越える」こと、そのために私たちはどうしていくべきか、ということを考え、行動し続けることを大切に。ロリス・マラグッツィが50年前に語った「100の言葉」の精神は、今も変わらず受け継がれている。そのことを強く感じるツアーでした。

100の言葉
レッジョ・エミリア・アプローチの理念の象徴でもある、ロリス・マラグッツィによる詩「子どもたちの100の言葉」より。こどもは生まれつきたくさんの可能性や能力を持っていて、それを「奪わないこと」が何より大切だという考え方。

過去のスタディツアー参加者の声

実践の過程が具体的で学びになりました。こども達に寄り添い、身近なものから広げていき、全ての役割の大人が多方面から真剣に考え対話し合うからこそ、こどもの思いをつなげていける。その本気の姿勢は研究者で、ぶれないこども観でこども達を信じているからこそなせる事だと思いました。

レッジョ・エミリア教育の歴史、市民性、学びに対する考え、ドキュメンテーションやアトリエリスタについてなど、3日間で順を追って網羅出来たことがよかったです。

REMIDA(レミダ)視察では、美しい素材の数々が丁寧に保管されていて見事でした。使い古しではなく、企業で使われなくなった新しいもの。こどもを尊重しているからこそいい素材を提供する。そして環境の事まで考えている事に凄さを感じました。町の全てが協力して、循環している事に驚きました。

思考しながら探究が豊かになり、創り出していくおもしろさを味わいながら、自分の問いやアイデアとチームの仲間の問いやアイデアを交換しながら目的に向かっていくワクワクを実感し、保育に大切な視点への学びがあった。

環境設定や、空間の使い方、素材とデザインの融合など何もかもに惹かれました。

●内容は受入組織の都合により変更となる可能性があります。

<p>研修日程（2026年度は5日間プログラムのみの開催） 2026年11月9日（月）～11月13日（金） 全体日程 2026年11月7日（土）羽田空港発～ 11月16日（月）羽田空港戻り</p>	<p>研修内容 レッジョ・チルドレンの本拠地であるロリス・マラグッツィ国際センターでの研修、自治体立乳児保育所・幼児学校への訪問、アトリエワークショップなどを予定（日本語通訳付）。</p>	<p>2026年4月頃 エントリー開始予定！ エントリー開始時、詳細のご案内メールを希望される方はこちらのフォームにご登録ください。</p> 
--	--	--

まちの研究所の まざりあう 共創プロジェクト

VOL.6

保育とまちの循環

一加賀市にみる、これからのまちづくりの新しいかたち

2023年3月、石川県加賀市からお声がけいただき、まちの研究所は【同市における創造性を育む保育・教育の実現】を目的に包括連携協定を締結。「まちの保育園・こども園」で得られた実践知や国内外とのネットワークをいかし、レジャージェミリア・アプローチからの学びを取り入れ、こどもたち一人ひとりの創造性を引き出し、0歳からはじまる「学びの未来」

を保障する保育・教育を目指して、保育実践への伴走支援（保育・環境づくり、保育マネジメント改革）を行ってきました。さらにアンケート調査や現場の課題感をふまえながら、保育・教育関係者、現場の先生方との対話を重ね、これからの加賀市が大切にしたい保育ビジョンと行動計画を「加賀市保育ビジョン2024-2026」として策定する支援を行いました。



こども、大きな特徴の一つです。たとえばこんな事例があります。ある園の3歳児クラスが散歩に行った先で、ツバメのヒナを見つけました。ヒナは「ナナちゃん」と名付けられ、元気に成長したある日、空高く飛び立っていきました。「ナナちゃんに会いにまちへ行こう」子どもたちはナナちゃんとの再会を目指してまちの探索をはじめます。こどもたちはまちのことをよく知っており、地域の人やお店の人と交流し、情報を集め、普段の散歩では行かない道や神社の裏道、山の中にまで進んでいき、山の上から見た山中(地名)のまちの景色に「うつくしい」とため息を漏らすことも。こどもたちは街のあちこちに「きせきのねっこ」「でんせつのかいだん」などの名前をつけてゆき、「まちせんぶがたからもの」という言葉が生まれました。この経験は保育者にとっても散歩の概念を広げてくれ、また家庭でもまちの探索のつづきを楽しんでいる姿がみられました。



そんなことを繰り返すうち、保護者の反応も大きく変化していきます。送迎時に急いで園をあとにしていた保護者が、今では足を止めて立ち止まり、園に掲示しているこどもたちのドキュメンテーションを見ながら先生と会話するようになりました。



「なんごうまちのいどみずがかがみたいでもじやもじやしていききれいだった」(絵・言葉/ゆずは)

まちの文化をつくる一員として

取り組みも3年目となったいま、こどもの姿が園の枠を超えて、まち全体を巻き込む「まちづくりのフェーズ」に変化しつつあります。これまでの保育は「園だけで、こどもが大人にしてもらうもの」だったのが、こどもたち自身がまちに出て、まちの文化をつくる一員としてアクションを起こす主体へ。園自身も、まちとどう関わるかを一緒に探究していく姿勢に変わりつつあります。行政とのチームワークもこの取り組みの大きなカギになりました。加賀市子育て支援課のみなさんが本当に丁寧に現場の先生方に伴走して下さったこと、学校関係者、まちの人たちとのコミュニケーションのハブとなって下さったこと。加賀のこどもたちの未来をどう支えるか、3年間の積み重ねを経て、理念だけでなくやりがいまでを行政も含めて共有できていること、本音で対話し、保育現場の変化を喜び合える関係性ができたことはなよりの成果だと感じています。

保育をまちにひらく

園に直接関わらない市民の方にも、保育で大切にしていることも観や取り組みを知ってもらい、こどもたちと一緒に街をより良くしていくために何ができるかを考えていただくワークショップを企画しました。園を中心に起きている変化を、「市」という大きな単位にどう広げていくかが課題のなかで挑戦ではありましたが、こういった市民参加型の



「いえ、みち、やま、いど、はちのす まちがわらった」(絵・言葉/かく)

場は、こどもの環境づくりに関心のある市民同士が繋がるきっかけとしても機能してくれました。最近では地域の造園業者の方がミカンの木を提供してくれたり、住民の方が遊具をくださるなど、まち全体で保育を支える文化が自然に生まれています。このこどもと共に歩むまちづくりの取り組みは、まちづくりビジョンとして2026年5月頃、加賀市から公表される予定です。



石川県加賀市は、白山の麓から海岸へとつづく豊かな自然と歴史・文化を持つまちです。城下町を中心とした温泉郷、漆器・九谷焼などの伝統工芸、127町で受け継がれる獅子舞による祭り文化など豊富な資源をもつ加賀市では、現在、教育改革・保育改革が行われています。人口減少や若年層の流出に歯止めをかけるため、「スマートシティ加賀」を掲げ、デジタル化と人材育成の取り組みと並行して本改革を進めるなかで、手がかりとなったのがレジャージェミリア・アプローチでした。「こどもは生まれた時から有能で可能性をもつ権利の主体であり、一市民である」というレジャージェミリアの哲学に基づき、

①一人ひとりの個性を尊重し、認め合う
②創造性豊かに自らの表現を楽しむ
③発見したり、考えたり、試したり、確かめたりしながら自ら学ぼうとする
という3つの保育目標に向かいながら、12の公立保育園での取り組みがはじまりました。

こどもとまちとの関係性の変化

この保育ビジョンには、具体的な保育内容だけでなく、「まちぐるみの保育・教育を実現する園づくり」が示されています。こども→まち、まち→こどもへのアプローチが循環し、こどもがまちの文化を担う一員となることで、全ての市民のウェルビーイングとシティブライドの醸成を目指す姿勢が織り込まれて

こども、保護者、まち
またある園の4歳児クラスでは、園庭で「穴」を見つけたことから、こどもたちの「穴探し」が始まりました。穴をリサーチしていることを保護者へ伝えると、横穴式古墳や井戸など、まちのさまざまな「穴」情報が集まってきました。はるか昔に築かれ、数々の出土品も発見されている、山にぽっかりと空いた80基もの横穴。実際に穴の「中」に入る体験を経て、興味は「穴の中の世界」へと思考が深まっていきます。また協力いただいた井戸のあるお宅では、まちの人が井戸周辺の草刈りを予めしておいたり、井戸を見るための敷物を敷いて出迎えてくださるなど、人のあたたかさにも触れることができました。このような経験はこどもたちの表現をより豊かにし、そんなこどもの姿を見て、保育者自身も「もつとまちを知ろう」という考えになり、保護者の紹介で地域の人と対話する機会も生まれました。

INFORMATION

EVENT 「FAMILY GREEN アトリエ」 次回3月&GW特別イベント開催
まちの研究所では、森ビル株式会社さんと共催で、レジャージェミリア・アプローチからインスパイアされた屋外アトリエイベントを開催しています。
通常開催 3/28(土) 5/23(土) 10:00~16:00
港区立我善坊 横川省三記念公園 東京都港区麻布台1丁目1-3
*参加無料・事前申込不要 *雨天時は翌日に顺延
ゴールデンウィーク特別回 5/2(土)~5/6(水祝) 11:00~17:00 麻布台ヒルズ 中央広場周辺
*参加無料・事前申込不要 *雨天時はコンテンツを一部縮小して開催

コミュニティコーディネーター講座 今年度も開催決定
3/27 FRI 17:00~21:00
UoC UNIVERSITY of CREATIVITY
「コミュニティコーディネーター(CC)」とは、保育園・こども園・子育て支援施設の現場で、地域とこども・保護者・保育者の橋渡しをする専門職。私たちは2018年より公開講座を開催しています。「今回のテーマは「ともにいることの意味〜ここのよい“つながり”とは?〜」。詳細はPeatixにてご確認ください。
3/27(金) 17:00~21:00 UNIVERSITY of CREATIVITY 東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー23F
現地参加(¥1,000/お茶菓子付) または オンライン参加(無料)
共催: 東京大学大学院教育学研究所附属 発達保育実践政策学センター(CEDEP)

「レンズ」2026年度 新規入会募集&現地見学会
幼児~小学生のための クリエイティブラーニングスクール
「好き」をみつける
【土日に現地見学会・オンライン説明会開催中!】まちの研究所運営のクリエイティブラーニングスクール「レンズ」では、2026年度から対象年齢を年少~小学6年生に広げ、プログラムをパワーアップ。未就学児の親子クラスも新設します。見学会・説明会の日程は右記からご確認ください。お気軽にご参加ください。

MEDIA 発達 185「発達」 185: 子どもの可能性を拓くアートと保育
加賀市のプロジェクト、まちのこども園 代々木上原での事例について掲載いただきました。
「保育ナビ」2026年2月号 汐見稔幸先生と弊社松本との対談を掲載いただきました。
RECRUIT 採用説明会、開催中です
まちの保育園・こども園では、毎月採用説明会を実施しています。互いに学び合い、対話しながら、まちの保育園・こども園の文化・保育を共につくってくださる方との出会いを楽しみにしています。ご関心のある方は、日程をご確認の上、フォームからお申し込みください。
あとがき 何かと慌ただしい年度末ですが、通勤中にふと見上げた梅の木に花を啄むメジロの姿に癒されたり、野良猫との会話を試みたりしながらやり過ごしている今日この頃。どうかみなさまも、少しでもゆつたりとした時間が過ごせますように。今回もお読みいただいたみなさま、制作にご協力くださったみなさま、どうもありがとうございました!
本誌に関するお問い合わせ: press@machihoiku.jp